

2. 2010年の事業ハイライト

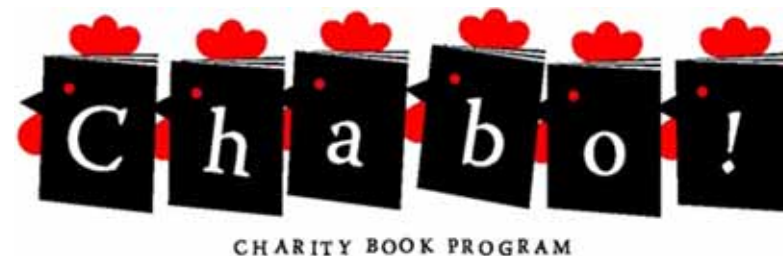
2-1 2つの緊急支援

- ハイチ大震災
- パキスタン北西部大洪水

2-2 世界9カ国での自立の支援

- スーダン&スリランカ

2-3 リーダー育成プログラム「CHANGE」



2-1 2つの緊急支援

- ハイチ大震災
- パキスタン北西部大洪水

2010年は、2つの自然災害の緊急支援に出動しました。

緊急支援では、刻々と変化するニーズの中で、現地政府や国際機関、他の援助団体と連携しながら、必要なものを、必要とする人々へ、必要なだけ、なるべく早くに行き渡らせるためのノウハウが必要です。

また、その後の復興までの長い道のりを、被災者が主体となって歩めるよう、緊急時から「自立」のサポートを行います。





ハイチ大震災

2010年1月12日(現地時間)、中米の島国ハイチ共和国の首都・ポルトープランスの南西約15kmを震源にマグニチュード7.0の大地震が発生しました。300万人以上が被災し、避難者数は200万人、死者数は22万人以上に上るなど、2004年末に発生したスマトラ島沖地震に匹敵する大規模な被害をハイチに与えました。

その後、ハイチを度々襲う、豪雨やハリケーン、洪水、また、同年10月のコレラの大流行(5,300が死亡)は、劣悪な避難環境と貧困にあえぐ人びとの生活にさらなる拍車をかけました。

- 人口:988万人(2008年)
- 国土:27,750km²(四国と九州の間)
- 言語:仏語、クレオール語
- 国家予算:支出13億ドル 収入10億ドル

- 世界初の黒人による共和国
- カリブ諸国で最初に独立した国
- アメリカ諸国で最貧国





緊急支援 *in Haiti*



緊急時から「自立」を支援

地震以前から、長く貧困や自然災害、政情不安や治安の悪化に悩まされて来たハイチは、西半球で最も貧しい国のひとつであり、長らく国際社会からの支援を受けてきました。そのため、避難所(テント村)での支援に慣れてしまった人びとの中には自宅に戻りたがらない人も出てくるなど、地震発生後から1年を経てもなお、数十万人を超える人びとが避難所での生活を続けています。

ジェンでは、自立支援の必要性が強く感じられるハイチで、ハイチの人びと自身が国や地域の問題解決に主体的に関わるためのプロジェクトを行いました。



避難所(テント村)とテント村で暮らす人びと



緊急支援 *in Haiti*



物資の配布を通じた自立の支援

物資の配布は、その方法次第では、暴動や争いを引き起こす可能性があります。反対に、適切な方法で行うことで、コミュニティの絆の強化と人びとの主体性が発揮されます。ジェンでは、支援の対象となる世帯を選ぶにあたり、地域のリーダーの協力のもと、各世帯の被災状況を一軒一軒訪問しながら、エリア内でも最も家屋被害の大きい世帯を特定します。緊急時から地域の主体性を損なわない支援に徹底的にこだわります。

地震発生後、3名のスタッフをハイチに派遣。調査の結果、首都から50km離れた町グラン・ゴアーブで、当面の住居となるテントを建てるための道具(シェルターキット)の配布を決定しました。2月～5月の間に、住民の協力を得ながら、合計4,700世帯への配布を完了しました。

<グラン・ゴアーブの状況>

- 地震発生から15日経過した時点で物資配布が皆無。
- 60%以上の建物が倒壊。トイレ等の衛生施設も壊れ衛生環境が悪化。
- ハイチ全域で活動しているNGOは415団体。同地域は3団体のみ。
- 住民は屋外で寝起きしており、ハリケーンの季節(4月頃)に備え、雨風を防ぐための住居が早急に必要。
(既に廃材や葉を集め、仮の住居を建てている住民も見受けられた)

<配布物資>

- ・シェルター建設用の材料(トタン)
- ・ツールキット(軍手、くぎ、ハンマー、のこぎり)





緊急支援 *in Haiti*



ツールキットの配布



配布を待つ住民に混乱が生じないよう配布のルールを説明



協力して荷物の積み下ろしを行う地域の人びと



ツールキットで当面の住居を建設



名簿の名前が呼びあげられる家族が受け取りのサインをする



配布を手伝う地域の若者たち



緊急支援 in Haiti



衛生促進キャンペーンを通じた自立の支援

2010年、1月の大地震の後、8月には再びハリケーンがハイチを襲い、10月にはコレラの猛威が2,000人以上の命を奪いました。コレラの流行は、震災後の長引く避難生活での衛生環境の悪化と人びとの衛生知識の不足が原因でした。

ジェンでは5月より、地震で大きな被害を受け、コレラが蔓延しているグラン・ゴアーブとレオガンで、地域住民50,000人を対象に、衛生促進キャンペーンをスタートしました。次にこの惨禍を防ぐためには人々の衛生意識の変化を促すことが必要です。その結果、459人の住民が、ジェンのトレーニングを受け、無償の衛生プロモーターとして、地域の衛生環境の向上のために活躍しました。



住民に衛生知識をわかりやすく説明



地域を一軒一軒訪ねて衛生環境チェック

多くの人びとが仕事に就けないハイチでは、当初、無償で働くプロモーターの存在に懐疑的な住民もいました。その後、コレラ蔓延の実質的被害とプロモーターたちの努力によって、衛生対策の大切さが広く理解されるようになりました。それに伴い、地元住民の間で、衛生プロモーターの評価が上がってきています。今では、多くの人々がコレラの情報と予防法を教えるためにジェンの衛生プロモーターを訪ねています。



緊急支援 in Haiti

ジェニファー(26歳) レオガン在住

「家が壊れ、収入もなく、3人の子どもを一人で抱え、私は家族のこれからを考えると絶望の淵に立たされました。

しかし、最悪の日は過ぎていきました。

ジェンを含む援助団体が村にやってきて、

私の壊れた家を見て、状況と必要なものを調査してくれました。

早速その次の週に、ジェンが仮設小屋を作る材料を配布しに村に戻ってきました。

私には仮設小屋を作れる家族がもういないので、近所の人たちが手伝ってくれました。

子どもたちも夜を怖がることなく眠れるようになりました。

私たちは飲み水を200m先の井戸から汲んでいたのですが、

地震で壊れ、村の800世帯全員が、飲み水を手に入れられなくなりました。

衛生上安全ではないと知りつつ、仕方なく近くの川の水を汲んで飲み水や料理に使っていました。

そうしていると、地震から9か月経った頃、ハイチでコレラが蔓延してしまったのです。

そんな中、ジェンがまた私たちの村に帰ってきてくれました。

壊れてしまった井戸を修復し、ポンプがまた動くようになりました。

今、私たちには仮設小屋、きれいな飲み水、調理器具はあります。

しかし、まだ貧困な状態からは脱することができていません。

もちろん一生懸命その貧しさから脱するために働かなければならないのですが、

私たちの国自体が大変貧しいので人道支援の手に頼らざるを得ない状況にあります」





緊急支援 *in Pakistan*



モンスーンの雨は、水力発電や農業など、南アジアの経済にとって重要なものです。一方で、パキスタンではその雨により、多くの命や農地、家畜を奪われるというような打撃を何度も経験してきました。

中でも、2010年7月27日から8月2日にかけてパキスタン北西部ハイバル・パフトウンハー州(旧北西辺境州)を中心に起きた洪水は、近年まれにみる災害を引き起こしました。死者1,900人、被災者2,020万人以上、破壊された家屋は190万世帯に上りました。国土の3分の1が水に浸かり、主要なインフラは全てが水に浸かりました。

ジェンでは、洪水発生直後に初動調査(被害状況と、それに伴うニーズ調査)を実施。それに基づき、住居や生活必需品を失った人びとの中でも特に困難な生活を強いられている人びとを対象に、緊急物資配布からその後の生業復帰をサポートする一連の洪水被災者支援プログラムを開始しました。



緊急支援 *in Pakistan*



必要な物資を必要とする人びとへ ～ 現地スタッフの活躍

パキスタンでの支援においては、安全上の課題が常につきまといます。

今回の事業地であるコハート県とチャルサダ県は、洪水で最も大きな被害を受けながら、政府と反政府武装勢力の戦闘が発生している地域に隣接しているなど、支援を実施する上で、治安上の課題が多くありました。

外国人の安全確保が難しいなか、この事業を可能としたのは、2005年(カシミール大震災支援)、08年(南西部バロチスタン地震)、09年(旧北西辺境州)と、パキスタン国内でのいくつかの緊急事態に出動し、自立支援のノウハウを身に付けたパキスタン人の現地スタッフの活躍でした。

洪水発生前から、同地域の情勢を調査していたスタッフは、災害直後から、フィールドでのニーズ調査と支援を開始することができました。その後、コハート県で、当面の居住スペースを確保するためのテントや、避難生活の衛生環境を保つための「衛生キット」などの緊急生活支援物資を600世帯に配布し、チャルサダ県では、2,840世帯へ「シェルターキット」(住居を修復・再建するための道具と資材)など、最も必要としている人びとへ支援を届けることができました。



住民へのニーズ調査(チャルサダ県)



警察などのエスコートのもと、より安全に物資配布ができる方法を検討します。

緊急支援物資(シェルターキット)の配布

調査の結果、洪水で資材を失い、資材を購入するための収入が無い人びとは、家の修復もできない状態にあることがわかりました。加えて、本格的な冬が到来する前に、一時的に避難している屋外のテントから住居に移り住むことが必要でした。

ジェンでは、チャルサダ県で、住居が破壊され、自身の収入で家を修復できない水害被災者計2,840世帯に対して、シェルターキットを配布しました。結果、人びとは、その道具で住居を修復し、元々住んでいた土地を離れることなく、厳しい冬が到来する前に、親戚の家や屋外での生活を終了し、屋根のある住居に移り住むことができました。



引換券の配布と配布方法の説明

チャルサダ県の34,657世帯の被災世帯のうち、
1. 貧困世帯、2. 人数が多い世帯、3. 子どもの数の多い世帯、4. 母子家庭、5. 家長に障がいを持つ世帯 2,840世帯(20,788人)に配布しました。



シェルターキット(のこぎり、クロー・ハンマー、鉄板用はさみ、軍手3組、そして工具用袋の工具類セットと、トタン板14枚、竹8本、釘、ロープ、針金の建設用資材)



緊急支援 *in Pakistan*



現地モニタリング ～ 洪水から5カ月後。配布物資の使用状況

チャルサダ県で配布したシェルターキットは、洪水から5カ月後、各世帯の必要に合わせて様々な形で活用されています。



ラジ・ワリ・カーンさんは、トタン板を活用し、家族のために部屋と屋根、扉、窓を作りました。



マダド・カーンさんの障害を持つ息子イムラン君は、彼と家族の為に父さんが作ってくれた家を嬉しそうに話します。



「この家は私にとって、とても大切なモノです」と語るラザ・カーンさん(左)の大切な家の壁には、造花の飾りが施されていました(右)。



トタン板を使ってトイレを再建している家も。



緊急支援 in Pakistan



ムシュタク・カーンさん チャルサダ県在住

ムシュタクさんが暮らしを立て直すために最低限必要だったのは、仕事と安全な住まいでした。

彼は、妻と子ども2人と暮らしていました。裕福ではありませんでしたが、夫婦は子どもたちの将来のために懸命に働きながら毎日を幸せに過ごしていました。暮らしは少しずつより良い方へ向かっていきましたが、そこに、あの
大洪水が起こり、一家は全てを失いました。一家は、しばらく、絶望と不安から抜け出すすべを見つけられずにいました。



洪水直後にジェンが訪れた時のムシュタクさんの家。

しかし、ムシュタクさんはこのような状況を幾度か経験していました。今回の洪水は彼にとってかなりの後戻りでしたが、やがて彼は気力を持ち直し、少しずつでも生活を立て直していこうと決めました。安月給でも自治体での仕事があったので、まずはそれを続けました。

この時のムシュタクさん一家に最低限必要だったのは、安全な住まいでした。

ジェンは、洪水直後にムシュタクさんの家に調査に来た援助団体の一つでした。人との交流は彼に新しいやる気を与えました。ジェンが配布したシェルターキットで家を建て、昼も夜も安全に暮らせるようになりました。

彼は生活基盤を立て直しましたが、以前の生活を取り戻し、家族の未来の計画に向けて進むには長い時間がかかります。奥さんも熱意を新たに仕事を再開しました。2人の一生懸命さは少しずつ実を結び始め、子供たちもまた学校へ行けるようになりました。少しずつ、洪水で失った生活用品も買えるようになりました。

洪水から一年経った今も、ムシュタクさん一家はまだジェンが支援したシェルターで暮らしています。新しい家を建てるために、貯金をしています。ムシュタクさんは、今度は前よりもっと良い家を建てられることを前向きに信じています。



緊急支援 *in Pakistan*



生業復帰支援～農業への復帰

チャルサダ県の人びとは農業と酪農を主な生業としています。地元住民の収入源は野菜などの季節の作物で、肥沃な土壌と豊富な水が必要です。洪水は、人びとから農作物や農具を奪ったばかりでなく、農地にも被害を与えました。ジェンでは、12月より生業復帰のための農業支援を開始しました。今後、ハイバル・パフトウンハー州の農家1,500世帯を対象に、①農業キット(種子、肥料、農具)を配布し、②洪水で被害を受けた農地を修復するためにトラクターを貸し出し、③洪水で損傷した農地の修復に関する農業専門家による指導などを行うことで農業への復帰をサポートしていきます。



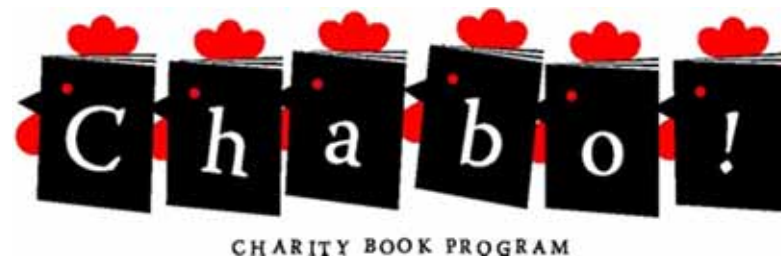
2-2 世界9カ国での自立支援

- スリランカ生計回復支援（北部は緊急支援）
- スーダン衛生環境改善支援

ジェンの自立支援は、再び元の「自立」した生活へ戻るまでの道のりを支える支援です。

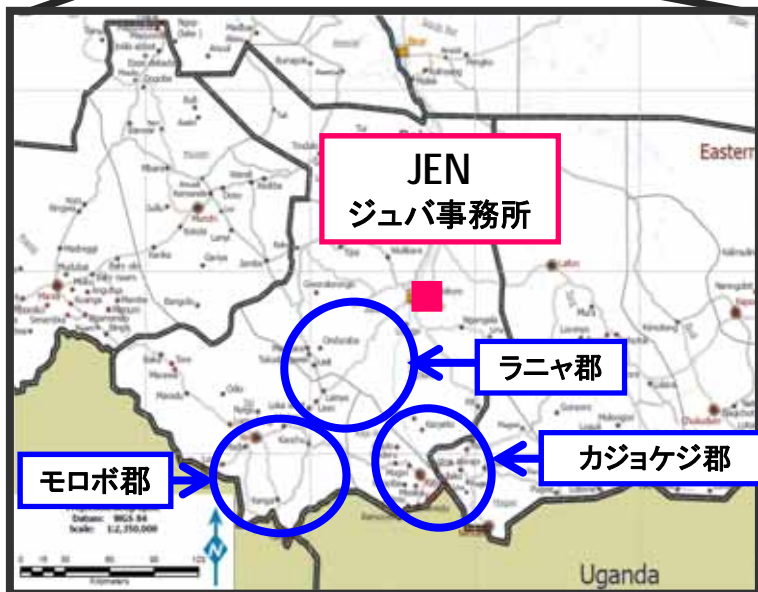
支援の効果が持続するよう、事業を通じて、コミュニティの力を最大限に引き出すきっかけと仕組みづくりを行います。

今年は独立のための投票を控えている南部スーダンと、25年以上にも渡る長い紛争を終えたスリランカを含む9カ国で自立の支援を行いました。





自立支援 in スーダン



中央エクアトリア州

南部スーダンでは、2005年の和平合意成立以来、370万人の国内避難民と35万人の難民が帰還を開始しました。2011年1月には南部スーダンの独立を問う住民投票が予定されるという情勢の中(1)、南部スーダンは国造りのための様々な課題に直面しています。

ジェンでは、2007年より、ウガンダとの国境にある中央エクアトリア州で、帰還してくる人びとが安心して再び自国に再定住できるようにするために、主に地域の中心である学校で、衛生環境の改善プログラムを継続してきました。

これまでに、ラニャ郡、テレケカ郡、モロボ郡、カジョケジ郡で、衛生施設(井戸やトイレ)の建設(49校)、子どもや教師、地域の住民を対象とした衛生教育(159校)や設備管理委員会のトレーニング(47校)を完了。

2010年は、学校数を大幅に増加し、衛生意識がコミュニティ全体に波及するための自立発展的な仕組みづくりを強化しました。

(1)投票は、2011年1月9日～15日に実施され、7月9日、アフリカ大陸で54番目の国「南スーダン共和国」が誕生しました。



自立支援 in スーダン



衛生環境の改善を通じた自立の仕組みづくり

南部スーダンでは、「水と衛生」の問題は重要かつ深刻な課題です。2009年は、急性下痢症35,000件とコレラ140件が報告されました。これは、乳幼児死亡率の高さにもつながっています。

2005年の和平合意以降、海外からの援助が急速に入って来たスーダンでは、支援が功を奏し、衛生設備(井戸、トイレなど)のインフラが整い始めています。

今後は、効果を持続させる仕組みを作ることが重要です。

ジェンは、主に地域の中心となる学校で、トイレや井戸などの衛生施設を整備し、子どもたちや地域の人びとへ衛生教育を行ってきました。

また、水衛生施設管理委員会を結成することで、地域住民が協力して問題解決する仕組み作りを支援してきました。井戸や施設の修理に関する技術訓練やそれを維持管理するための意識を促すワークショップを行うなど、委員会のキャパシティを向上させることで、コミュニティが自立を目指して団結するための仕組みづくりを支援しています。



学校での衛生教育



自立支援 in スーダン



コミュニティのキーパーソン 教師へのワークショップ —気づきを促し、解決方法を発見する。

衛生教育では、ジェンの事業終了後も、先生が学校で衛生教育を続けられるよう、先生を対象にしたトレーニングを行ないました。トレーニングでは、自ら衛生にかかわる問題に気づき、その解決方法をみつけ、自発的な実践を促すための参加型の手法(「PHAST」(2)と呼ばれます)を使います。グループワークをしながら、参加者がそれぞれの学校の衛生環境を改善するためのプランを作成します。3日間の座学のあとは、実際に地域での実習を行い、自信をつけて各学校に帰ります。

ジェンが活動を終えたのちも子どもたちに衛生教育をおこなう先生の姿が目に見えます！



(2)PHAST(Participatory Hygiene and Sanitation Transformation): コミュニティレベルでの環境衛生改善を図るため、住民参加を促し、参加型手法に基づいたアプローチ。参加型ワークショップを通じ、環境衛生に係る問題を住民自らが分析し、問題解決を考え、計画実行する能力を培うことを目的としています。



自立支援 in スーダン

学校や井戸管理委員会のモニタリング ～事業効果の持続性の評価

2010年、ジェンが過去に事業を行った中央エクアトリア州モロボ郡、ラニャ郡、テレケカ郡の15の小学校で、設置した施設やその使用状況、管理委員会の活動などについてモニタリングを行いました。



学校内に「WASH HAND BEFORE EATING」のプレートが！

ジェンのトレーニングでは、先生たちが自分の学校へ戻って実践する行動計画を作りましたが、多くの学校でその行動計画が実施されていたのです！ある学校では、ワークショップに参加した先生の主導で、PTAと協力し、トイレの前に手洗い場が設置され、子どもたちがトイレを使った後にきれいに手を洗っている姿が見られました。またある学校では、敷地内に衛生や健康に関するメッセージ・プレートが設置されていました。ジェンの衛生トレーニングを受けた先生たちが自らリーダーシップを発揮し、衛生環境改善を推進している例が確認できました。

来年4月からは、積極的な活動を行なっている学校と、さらなるトレーニングが必要な学校の教員が相互に訪問し、意見の交換を行なう予定です。気づきに基づく自発的な行動のファシリテーションと、対話を通して学習者同士が互いの力を発揮し協力して学ぶ「ピア・ラーニング」の促進を行なうことで、芽生え始めた自立の芽を周辺の地域へと広げるための働きかけをします。



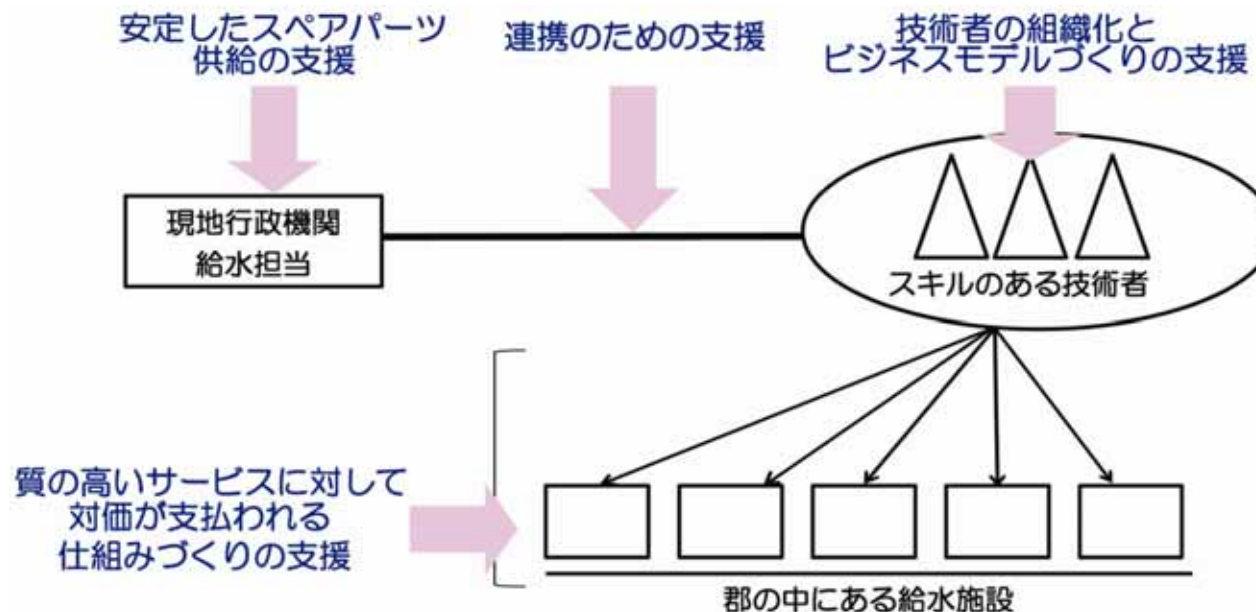
自立支援 in スーダン



持続可能な井戸維持管理のネットワークの構築

ジェンでは、井戸掘削やトイレの建設、またその管理トレーニングを通じ、地域の衛生環境の改善を行っています。2010年～2011年は、これまで以上にコミュニティとの協働に注力し、地域全体の衛生環境の改善を目指します。

井戸やトイレの修復は、地域の管理委員会が主体となって行いますが、モニタリング(事後評価)の結果から、既存の井戸が故障しても部品の不足、技術者の不足、資金の不足などで、修理されずにそのままになっているケースが多くあることもわかりました。今後は、技術者の組織化を行い、ビジネスモデルづくりの支援をすることで、地域の井戸が持続的に維持管理される仕組みを作ること大きなテーマとしていきます。





自立支援 in スーダン



サミュエル・ロコンガ先生(31歳)/ モルサック小学校(カジョケジ)

ジェンが私たちの地域に来る前は、悲惨な状況でした。
戦争から避難していた人びとが他国や難民キャンプから帰って来て、人口が一気に増加していました。
井戸がないので川の水を飲んだり、水を得るために長距離を歩くことを余儀なくされました。
子どもたちも、学校を休んで4kmの距離を歩いて水を汲みに行きました。

モルサック小学校ではトイレがなく、水も不足していたため、下痢が多発していました。
これは、子どもたちだけとは限らず、地域全体の問題でしたが、子どもが多く影響を受けていました。

現在の状況

ジェンと一緒に井戸を掘り、トイレを設置し、安全な水が手に入るようになりました。
子どもや先生が衛生教育を受け、徐々に変化が現れ始めました。
子どもたちは、下痢で悩むことがなくなりました。(少なくとも数は減りました)
500m圏内に井戸ができ、水を汲みに行く女性と子どもたちの歩く距離が減りました。
また、学校にトイレができ、学校と地域の衛生状況が全体的に改善されました。

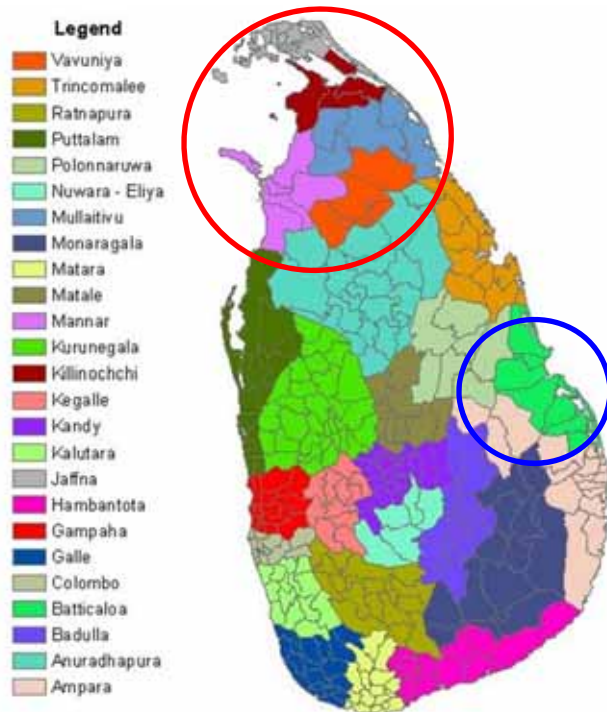
学校生活が改善

水を汲みに行ったり、叢で排便したりする必要がなくなったので、
登校率は確実に上がり、授業も時間通りに始まるようになりました。
学校の試験の結果もよくなり、不思議なことに、生徒数も増えました。

10年以内に成し遂げたいこと

衛生状態が完全に改善されているので、私の地域は水因性感染症で悩まされています。近い未来、よりよい衛生管理をすることで、この悩みが解消されることを願います。夜でも便所が明かりに照らされるように太陽光パネルが使えて、都会のような水洗トイレがあればいいですね！





北部

ワウニア県政府運営避難民キャンプ
「マニック・ファーム」

東部

スリランカ・バティカロア県
キラン郡およびチェンカラディ郡

25年以上にわたって続いていた内戦が2009年に終了したスリランカでにとって、2010年は、北部の復興が進んだ年でもありました。

戦争終結と同時に、人びとは長らく離れていた故郷への帰還を始めました。終戦直後に激しい戦闘のあったスリランカ北部の避難民キャンプに収容されていた国内避難民は、最大時で28万人に上りましたが、その後、2万人ほどまでに減少しました。19万人もの人々が、紛争で荒れ果てた故郷に帰還し、政府や国連、NGOの支援を受けながら生業を再開するための暮らしをスタートしました。

一方、2007年から帰還が始まっていた東部では、地域による復興の格差があり、支援が届いていない人々への緊急支援が必要です。

ジェンは、東部と北部にて、紛争から逃れた避難民と故郷へ戻った帰還民を対象に支援を実施しています。人びとが故郷安定した暮らしを取り戻すことによって、経済的、心理的な苦難を克服し、民族や宗教を越えて平和を信じられるようになることが、同じ紛争の歴史を繰り返さないために重要です。



自立支援 in スリランカ東部



復興支援 東部バティカロア県 人びとの暮らしを支える水源「農業用井戸」の建設

バティカロア県のキラン群とチェラカンディ群で、農業井戸の建設とコミュニティ強化ワークショップを行っています。北部では復興に向けてまだ多くの課題を抱えていますが、東部では、人びとが平和で希望の持てる生活を着実に取り戻しています。

東部では20年以上に渡り、水不足の問題が続いています。人びとは乾季(4月～8月)に定期収入がなく、町で日雇い労働者として働くことで家族の暮らしを支えていました。ジェンでは、昨年、稲作のできない乾季に畑を耕すための水源として、農業用の井戸の建設を開始しました。

2010年は、24村に40基の井戸を建設しました。農業の水源として使うのみならず、住民たち自身がそこから得た利益をさらに地域のために役立てていきます。



土砂降りの雨の中、井戸完成式典が行われました。住民で組織する井戸管理委員会への井戸の引渡しが行われます。



この井戸には、委員会で決めたグループ名「バタフライ」という名前がついています。井戸に対する住民の希望がこめられています。



緊急支援 in スリランカ北部



緊急支援 北部ワウニア県で紛争から逃れた人びとへ 北部最大級の国内避難民キャンプ「マニックファーム」での支援

2010年、北部で新しい事業が始まりました。25年の内戦が終了した後に故郷へ帰った帰還民や大規模避難民キャンプ「マニックファーム」(3)に避難する人びとへ2000世帯(7000名)へ、各世帯2か月分の衛生キットの配布を行いました。

国際NGOとしては初めて キリノッチ県での支援

これに先立ち、2010年の12月から1月まで、激しい戦闘のあった北部のキリノッチ県で給水を行いました。人びとが故郷に帰るまでの日々を健康に過ごせるよう、2つの村に1ヶ月間、日に2回から3回、水源と村々の水タンクを給水車2台で往復し、生活に必要な水を提供しました。

北部は、依然として、政府や軍の監視と規制が厳しく、より戦闘が激しく被害が大きかった地域への支援が届きにくい状況です。キリノッチ県はこれまで国際NGOの活動が許されていなかった地域ですが、水道局と連携することで、ジェンは、国際NGOとしては初めてこの地域で支援を始めることができました。政府軍の管理が厳しく、まだまだ国際スタッフは入れない状況ですが、現地スタッフが、支援が人々に行きわたっているかどうかを確認しています。



マニックファームでは外側は鉄条網で囲まれ、政府軍兵士が常に監視している。

※3 マニックファーム: 政府が造成し、政府軍が管理する国内避難民キャンプ



緊急支援 in スリランカ北部



北部ワウニア県で故郷に帰還した人びとへ 生活物資や住居建設資材の配布 と 農業用井戸の回復サポート

戦闘に巻き込まれた北部地域・タミル人住民のほぼ全員が、反政府勢力タミル・イーラム解放のトラ(LTTE)に「人間の盾」として囚われ、政府軍の追撃を逃れる避難生活を送り、最後には激しい砲火にさらされながら逃げ延びて来ました。

ワウニア県ワウニア・ノース郡では避難した15,948人4,206家族(全住民)が帰還を始め、現在、およそ2年にわたる避難生活を終え、人々はやっと故郷に戻り生活を立て直すために奮闘しています。戻った故郷では、住宅はほとんどが全壊し、生活や農業用の水源である井戸は戦闘で破壊されるか、放置されていたため荒れ果ててしまうなど、当面の生活の確保から生業回復までの支援が必要です。

JENでは、避難民キャンプから解放されワウニア県に滞在する帰還民に対し、帰還後の生活再建のためのサポートを行いました。

- 緊急シェルター・キットと保管食料を配布(586世帯)
- 補完食品の配布(5,544世帯)
- 農業用具の配布(308世帯)
- 井戸の修復(230基)と清掃(425基)





緊急支援 in スリランカ北部



シャンジーさん ワウニア県在住
～平和を信じる気持ち

シャンジーさんは、戦争中に夫を失いました。
3人の子どもと一緒に、11ヶ月前に故郷に戻ってきました。

村に帰って来たとき、家は全壊していて、
庭は森のように荒れ果てていました。
そして、たくさんの政府軍の兵士たちが家の周りを
うろついていました。
村の人たちよりも兵士の数の方が多いのです。
昼もよるも恐怖の中で過ごしていました。

村にたったひとつ残った井戸は、兵士たちも使うので、水汲み苦痛な作業でした。
兵士たちは、水を汲みに来た彼女に罵詈雑言を浴びせたり、
夜には彼女たち家族が住むテントまでやってきて
大きな音を立てて嫌がらせをしたりします。

そんな時にある日、ジェンが村に調査にやってきました。
ジェンのスタッフは、度々彼女の家状況に聞きにやってきました。
ジェンの支援が始まってから、この村に多くの人に戻ってきました。
道路が清掃されて環境がよくなったので、人々がどんどん戻ってきて、
不安がなくなり、平和の兆しが見えてきました。

今では、ジェンと一緒に修復した井戸の水で野菜作りを始めています。





その他の事業地



- イラク
- アフガニスタン
- ミャンマー
- インドネシア
- 新潟

を含む計9カ国 363,496人 の自立へ向けた取り組みを支援しました。

2-3 リーダーを育てるリーダーの育成プログラム 「CHANGE」の開発

ジェンが世界9ヶ国で行う自立の支援は、自然災害や紛争に被災した現地の人びと自らが主体となり、本来持っている力を発揮して自らの力で再び自立した生活を行うまでのプロセスをサポートする支援です。事業に参加する人びと全ての主体性やリーダーシップを損なわずに、発展させる事業のデザインを行います。

2010年は、復興を担う現地のリーダーを育てることのできるリーダーの育成プログラム「CHANGE」の開発に着手しました。

プログラムの実施は2011年を予定しています。

